

カントにおける学問の分類

Kant's Classification of Sciences

渋谷 久

Hisashi Shibuya

〔一〕

およそ学問は認識の形態をとる。認識は単なる知識ではない。知識 (Wissen) が学問 (Wissenschaft) に高揚するには一定の条件が必要である。知識が学問的認識になるためには、その知識は一つの体系の中へ組み入れられなければならない。体系とは「一つの理念のもとにおける多様な認識の統一」⁽¹⁾である。カントはあらゆる認識を区分するにあたって、認識内容を捨象し、認識主観の側を重視した。おもうに彼の認識論でまず問題になるのは、認識対象よりもむしろ認識主観である。重要なことは認識の仕方である。カントは次のようにいう。「私が客観的に考察された認識の総ての内容を捨象すると、総ての認識は主観的には歴史的であるか合理的であるかである。歴史的認識は所与による認識 (cognitio ex datis) であるが、合理的認識は原理による認識 (cognitio ex principiis) である。」⁽²⁾歴史的認識が所与によるということは、それが認識主観の外なるものに由来するということである。「或る認識がもともと何処から与えられたものであるにせよ、すなわちそれが直接的な経験ないしは物語、あるいはまた (普通の知識の) 教示によって与えられるにせよ、認識の所有者が他から彼に与えられる度に従って、すなわち与えられるだけ認識する場合にあっては、認識は歴史的である。」⁽³⁾

さて、総ての合理的認識は概念に由来する認識

であるか、あるいはまた概念の構成に由来する認識であるかである。前者は哲学的認識であり、後者は数学的認識である。哲学的認識は概念相互の関係を明らかにするものである。しかるに、数学的認識は概念に対応する直観を先天的に描き出さなければならない⁽⁴⁾。数学的認識では理性使用が具体的で、しかも先天的にのみ行なわれるのである。哲学的認識と数学的認識との区別は対象に関する認識の仕方、つまり認識の形式にある。哲学的認識は比量的 (diskursiv) であるが、数学的認識は直観的 (intuitiv) である。またカントによれば、哲学においては客観的には理性認識であり、しかも主観的には歴史的な認識が可能であるが、数学においてはかかる認識は不可能である⁽⁵⁾。哲学には概念とこの概念から生ずる個別的規定との間には区別があるが、数学にはかかる区別はない⁽⁶⁾。

ところで、総ての哲学的認識の体系がすなわち哲学である。「だが、総ての哲学は純粋理性からの認識であるか、あるいは経験的原理からの理性認識であるかである。」⁽⁷⁾純粋理性からの認識はもっぱら先天的になされる理性認識であり、純粋哲学ないしは純粋理性の哲学と名づけられる。ここでは「純粋」とは「先天的」の謂であり、「経験の助けを借りない」ということである。経験的原理からの理性認識は経験的哲学と呼ばれる。しかし、経験的哲学といえども理性認識の体系であり、経験的原理もまた単に経験的なものに終わるわけではない。経験的原理は先天的原理に支えら

れて初めて哲学の原理になりうるのである。カントでは経験的哲学とは応用哲学の謂である。応用哲学では先天的原理が後天的な素材に適用されるのである。

純粋哲学は更に二つに区分されるが、この点に関しては『純粋理性批判』と『人倫の形而上学の基礎づけ』との間に若干の違いがある。

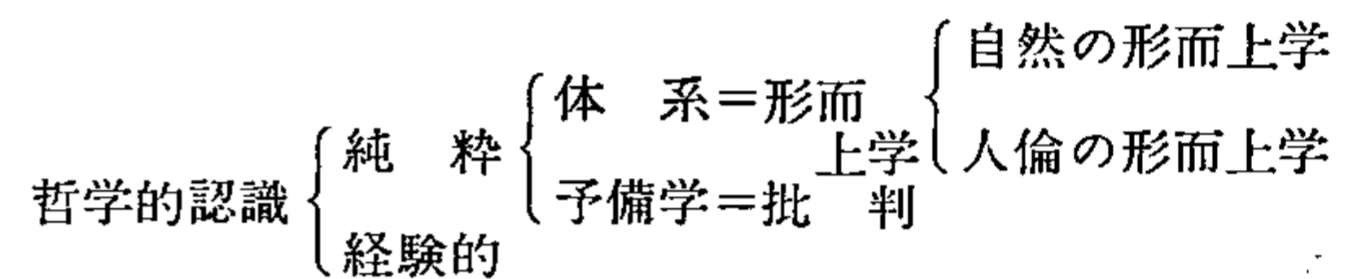
『純粋理性批判』によれば、純粋哲学の一部門は純粋理性の体系に対する予備学であり、これは正に批判である。批判の対象は人間理性そのものである。したがって、予備学すなわち批判は、先天的な総ての純粋認識に関して、理性の源泉と理性能力の限界を吟味するものである⁽⁸⁾。次に純粋哲学のもう一つの部門は正に純粋理性の体系であり、純粋理性からの全哲学的認識である。これをカントは形而上学と呼んでいる。尤も、カントは形而上学という名は批判をも含めた全純粋哲学にも与えることができるとしている⁽⁹⁾。後述することからも明らかになるであろうが、広狭という点からみれば、カントにおける形而上学には三義がある。私はこれを最広義の形而上学、広義の形而上学、狭義の形而上学と名づけて、三者を相互に区別したい。第3の形而上学については、カント自身も狭義の形而上学と呼ばれるのが常であるとしている⁽¹⁰⁾。この区別からすれば、批判=予備学をも含めた全純粋哲学は最広義の形而上学であり、予備学と並ぶ形而上学は広義の形而上学である。広義の形而上学は、純粋理性の思弁的使用の形而上学、すなわち自然の形而上学(狭義の形而上学)と純粋理性の実践的使用の形而上学、すなわち人倫の形而上学とに分かれる。自然の形而上学と人倫の形而上学についていうならば、「前者はあらゆる物の論理的認識の、しかも単なる概念に由来する(したがって数学を除く)総ての純粋理性原理を含み、後者は一切の行動を先天的に規定し必然

的ならしめる諸原理を含む。」⁽¹¹⁾

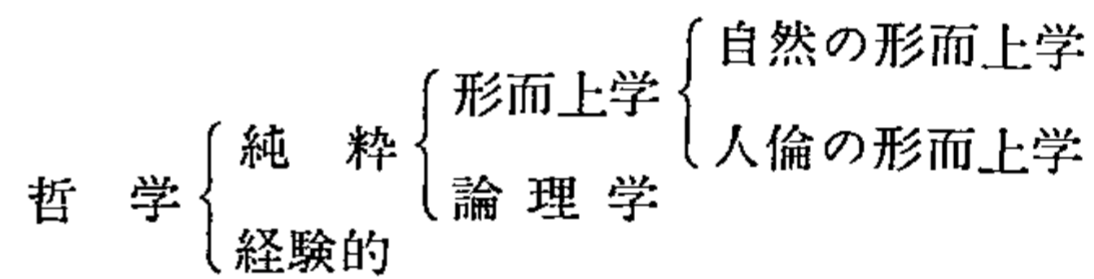
ところが『人倫の形而上学の基礎づけ』の場合にはこれと多少異なるところもある。ここでは総ての哲学(『純粋理性批判』では哲学的認識)は純粋哲学と経験的哲学とに分けられている。この点では『純粋理性批判』も『人倫の形而上学の基礎づけ』も同じである。ところが、後者では純粋哲学は、形式的であるときには論理学であり、悟性の一定の諸対象にかかわる場合には形而上学であるとされている。そして、更にこの形而上学は自然の形而上学と人倫の形而上学とに分けられている⁽¹²⁾。これらの事柄を図示すれば第1図のようになる。

第 1 図

『純粋理性批判』の場合

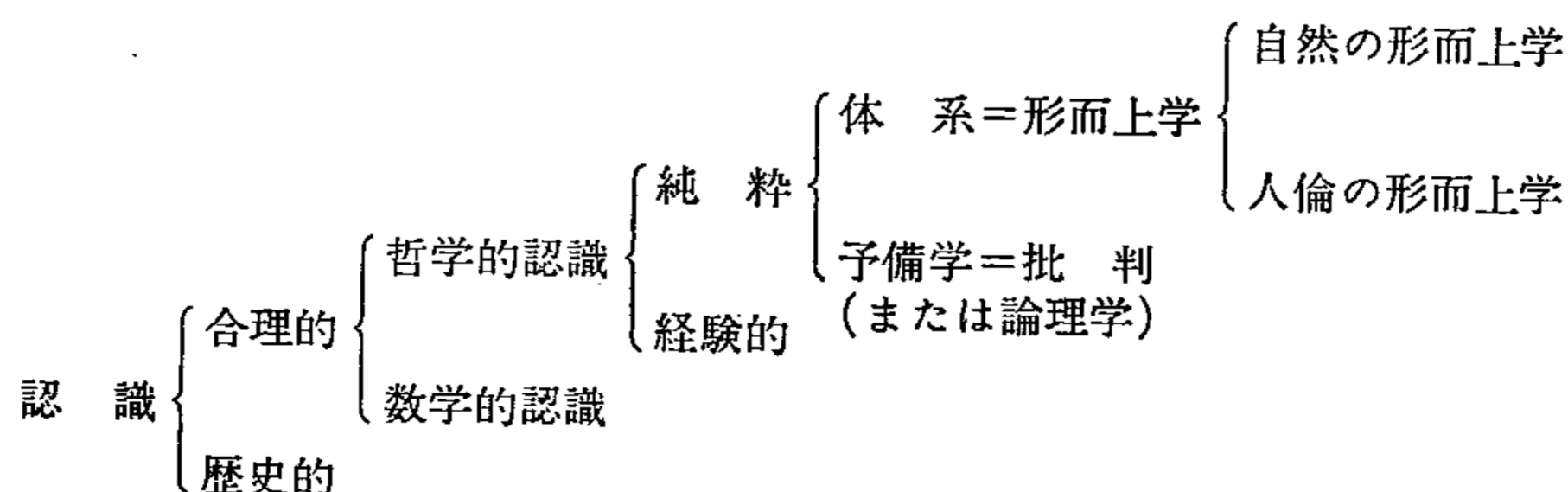


『人倫の形而上学の基礎づけ』の場合



第1図で問題なのは、予備学=批判が内容的に論理学と同じであるか否かということである。試みに『純粋理性批判』を繙くに、この著作全体の中で先験的論理学は極めて大きな比重を占めている。ごく大ざっぱには『純粋理性批判』は先験的論理学の書と看なすことができるであろう。しかも、この論理学は過去の独断的形而上学を批判し、新しき形而上学を樹立するための「予備学」であると理解することができるであろう。だが、そうであるとしても、いま問題にしている『人倫の形而上学の基礎づけ』の論理学が『純粋理性批判』の先験的論理学と同一であるというわけには

第 2 図



いかない。ただ『純粹理性批判』でカントがしている予備学＝批判と『人倫の形而上学の基礎づけ』における論理学との間には多くの共通点があり、一致する部分が少なくないのであり、ここには、論理学を諸学問に対する予備学として位置づけた C. ヴォルフの影響が認められるのである。

形而上学について詳論するに先立って、今までに述べた認識体系（学問）の区分を図示すれば第 2 図のごとくなる。

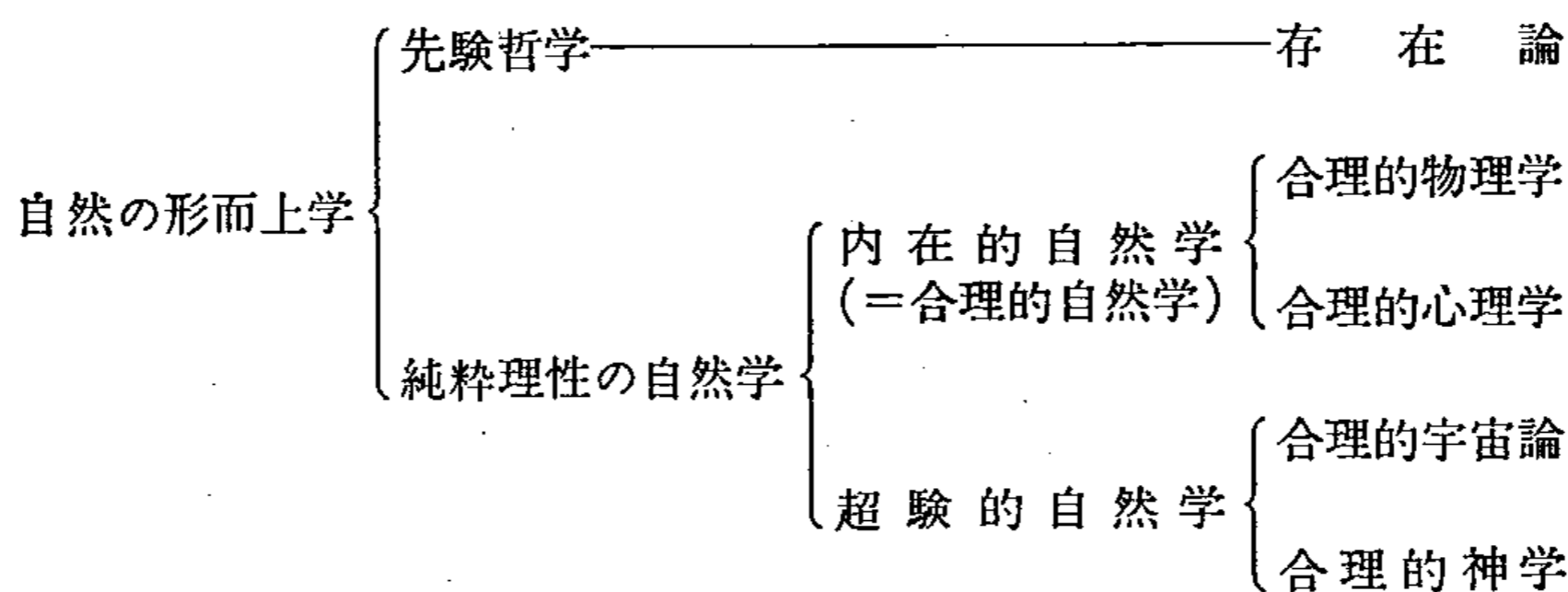
〔二〕

自然の形而上学にせよ、人倫の形而上学にせよ、これらは単に理性による合理的認識を目ざすものであるが、『人倫の形而上学の基礎づけ』によれば、この両者のおのおのに経験的部門が対応しているのである。それは経験的な物理学と実用的な人間学である。人間学については問題が多いので、あとで更に論じられるであろう。さて、形而上学は先天的純粹認識を特殊な体系的統一において明らかにしなければならぬ哲学である。自然の形而上学（狭義の形而上学）は先験哲学と純粹理性の自然学¹³とから成る。先験哲学は主として悟性と理性を問題にするが、特定の対象を想定しないで、対象一般に関係する総ての概念および原則の体系において、悟性や理性を考察する。カントは先験哲学を存在論と規定する。もちろん、この先験哲学はカント自身が実際に構築した先験哲学と全く同じものである、と解さない方がよいであろう。カントの哲学は先験哲学といわれるが、これが直ちに存在論であると断定することは困難である。カントの先験哲学をめぐって、それは存在論であるとか、あるいはまた認識論であるとか、さらにまた人間学であるとかというごとく、さまざまな解釈がなされているが、この点については今は触れないでおく。ただ、ここでは、カントの内部で伝統的な存在論と彼自身の意図する存在論とが混淆していたということを指摘しておきたい。伝統的な存在論は存在一般を考察するものである。特定の対象を想定しないで、対象一般を念頭におく限りでのカントは、伝統的な存在論を無視してはいない。ところが、対象そのものを問題にするのではなく、むしろそれに関係する悟性や理性を問題にする限りでのカントは、認識論者と

してのカントである。彼は伝統的な存在論を克服しようとしながらも、なお十分にそれを克服できなかったのである。対象そのものよりも、むしろ対象との関連において認識能力を考察するのが、先験哲学としての存在論である。よし対象を論ずるにしても、認識能力との関連においてそれを論ずるのが、先験哲学としての存在論である。カントでは対象に対する認識主観のあり方が問題なのである。

ところで、純粹理性の自然学は自然、つまり与えられた対象の総体を考察する。いうまでもなく純粹理性の自然学における自然考察は合理的なものであるが、この合理的な自然考察における理性使用は自然的であるか、超自然的であるかである。換言すれば、それは内在的か超驗的かである。内在的な理性使用は、理性の認識が経験において具体的に適用されうる限りにおいて、自然に向けられる。超驗的な理性使用は経験の対象の連結に向けられる。ところで、経験の個々の対象は正にその名の示すごとく経験されるものであるが、超驗的理性使用にあっては経験の個々の対象の連結は無限に進行するものであるが故に、連結そのものは一切の経験を超越している。したがって、ここで成立する自然学は超驗的自然学である。これと対照的に、理性の自然的（すなわち内在的）使用の場合に成立する自然学は内在的自然学と呼ばれる。超驗的自然学は対象の連結を問題にするが、カントによれば、連結には内的な場合と外的な場合とがある。前者の場合の自然学が全自然の自然学であるのに対し、後者の場合の自然学は全自然と自然を超越した存在者との関連を扱う自然学である¹⁴。なお、ここで問題になっている対象の内的連結と外的連結に関する事柄については、カントは『純粹理性批判』の「先験的弁証論」で詳細に論じている。その中の「純粹理性の二律背反」は主として内的連結を問題にし、「純粹理性の理想」は主として外的連結を問題にしているのである。

次に理性の自然的（すなわち内在的）使用の自然学を考察する。この自然学は合理的自然学とも呼ばれる。合理的自然学は自然を感官の一切の対象の総体として考察するが、感官には内官と外官とがあり、その対象も異なる。内官の対象は思维的な自然であり、外官の対象は物的自然である。し



かして、思惟的自然を対象とする合理的自然学は合理的心理学であり¹⁴⁹、物的自然を対象とする合理的自然学は合理的物理学である。「合理的」という限定詞がつくのは、両者が共に形而上学に属し、したがって先天的認識の原理のみを含まねばならぬからである。結局、狭義の形而上学、すなわち自然の形而上学は第3図のように分類される。

物的自然の形而上学としての合理的物理学は一般物理学とは異なる。カントにあっては一般物理学は、自然の哲学、つまり自然の形而上学であるよりは、むしろ数学なのである¹⁵⁰。一般物理学が内容とするものは、数学的認識である。合理的物理学が形而上学の系譜に属するのに対して、一般物理学は数学の系譜に属するのである。ところで、合理的物理学は、先天的認識の原理のみを含まねばならぬが、このような物理学は、いうまでもなく自然科学としての今日の物理学とは性格を異にするものである。今日の物理学に近いのは、合理的物理学ではなくして、むしろ一般物理学である。もちろん、カントの心中に去来した物理学は、ニュートンの物理学であったであろう。「数学と物理学とはその客観を先天的に規定すべきである、理性の二つの理論的認識であるが、前者はまったく純粹に規定し、後者は少なくとも部分的には純粹に規定するものの、そのときには理性の認識源泉とは異なる認識源泉に応じても規定するのである。」¹⁵¹ 物理学は先天的なものをその構造契機とするが、経験的なものをも自己の内部に含むのである。カントがいう本来の物理学は経験的要素をもつのであろう。第3図に示された(1)合理的心理学、(2)合理的宇宙論、ならびに(3)合理的神学は、伝統的な形而上学では特殊形而上学¹⁵²と称されるものであり、これらの学問がそれぞれ対象とする(1)靈魂、(2)世界、(3)神はいつの時

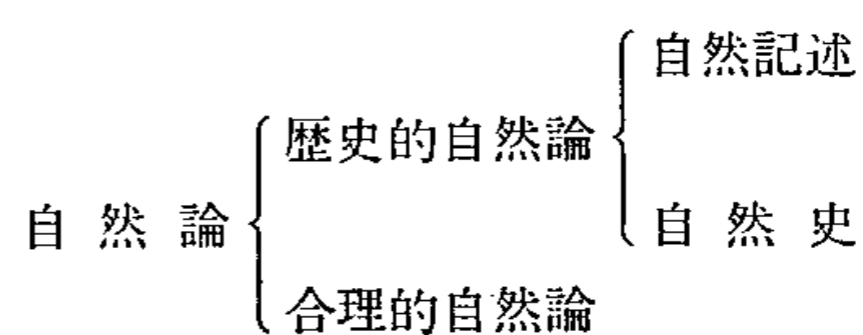
代にも常に哲学の重要な主題であり、課題であった。カントはこれらの学問については『純粹理性批判』の「先験的弁証論」で詳細に論じているが、結局、このような学問は独断的形而上学として正に批判の対象であり、やがては克服されるべきものであった。

〔三〕

今までわれわれは合理的認識といわれるものを主として論じてきたが、次に歴史的認識といわれるものと、これら二つの認識の交錯する面について論じてみよう。

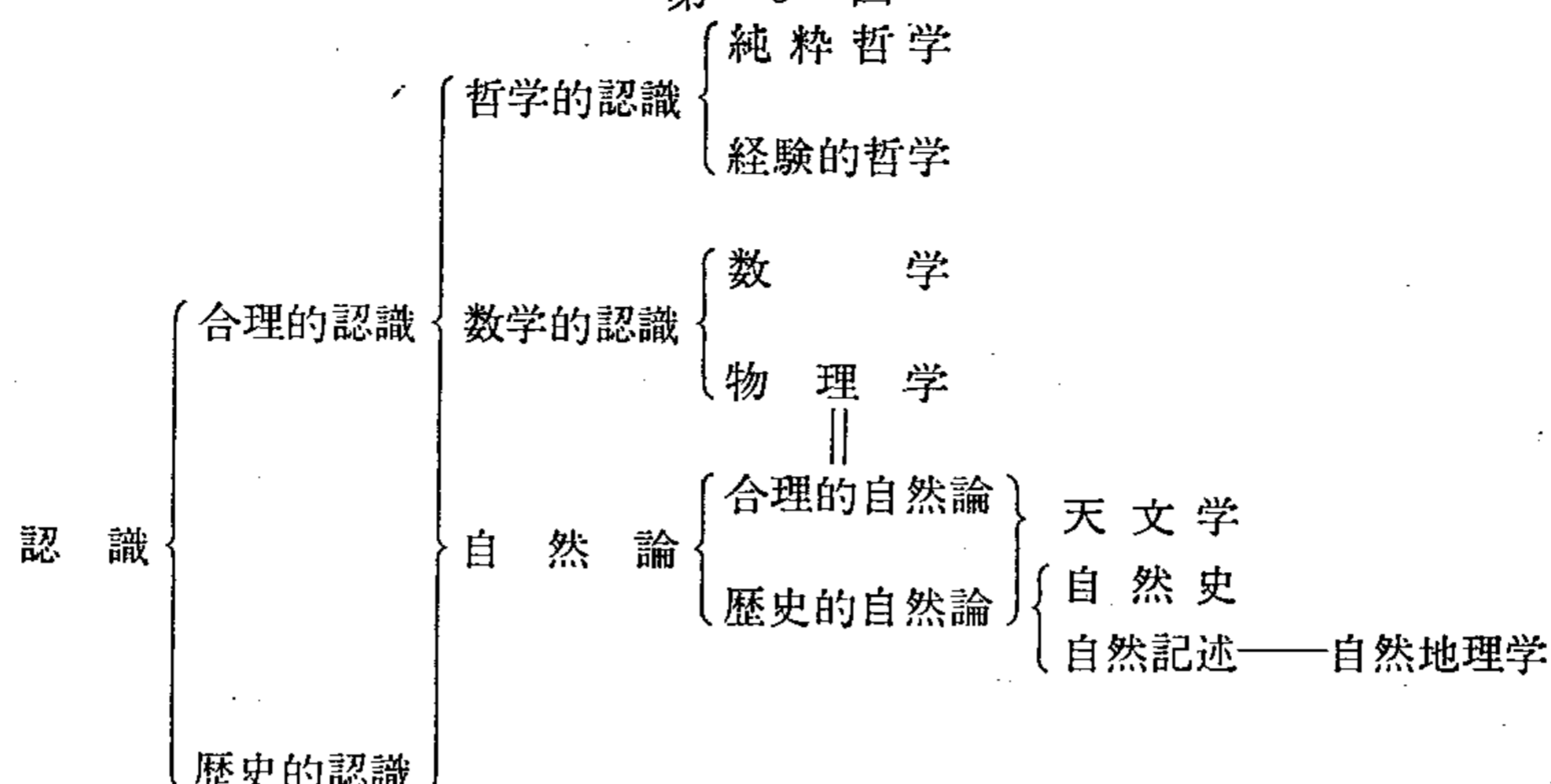
カントによれば、自然論(広義の自然科学)は歴史的な自然論と合理的な自然論(狭義の自然科学)とに分けられる。そして「史学* 的自然論は自然物の体系的に秩序づけられた事実以外のものを含んでいない。(そしてこれはさらに、自然記述と自然史とから成るといえよう。前者は類似性に従って自然を種類別に体系化するものであり、後者は時と場所との違いによる自然の体系的叙述である。)」¹⁵³ 総じて歴史的な自然論は経験法則に従って対象を論ずるものである。これは非本来的ないわゆる自然科学である。これとは対照的に、合理的な自然論はその対象を先天的な原理に従って論ずるものであり、本来的な自然科学である。自然論を分類すれば第4図のようになる。

第 4 図



カントの考えからすれば、自然論においては、

第 5 図



そこに数学が見いだされる程度に応じて学問的性格の度合が決まるのであるから、本来の自然科学は当然のことながら数学を自己の構造契機としなければならぬ。自然科学が数学的認識を含まず、単に概念からの理性認識であるならば、自然科学は形而上学と何ら異なるところがない。「……自然一般の純粹哲学、すなわち自然の概念を一般に作り成すもののみを探求する学は、数学なしにも可能であろうが、しかし一定の自然物についての純粹な自然論（物体論や精神論）は数学によってのみ可能である。そしてそこにア・プリオリな認識が見いだされる程度によって、それぞれの自然科学のうち本来の学が見いだされるのであるから、自然論はそこに数学が適用されうる程度によって本来の学を含むであろう。」¹²⁰ ところで、カントでは自然科学の典型は物理学である。彼が純粹自然科学というものは、物理学である。だが、物理学にあってはその原理は先天的なものであるが、その対象は外官を通じて受容されるものである。先天的原理が適用される正にその対象は所与であり、經驗的な性格を有する。物理学は、先天的原理による認識である限り合理的認識であるが、感官を通じての所与に関係する限り經驗的認識である。カントが物理学の認識を部分的に純粹であるとするのも、このことをさすのであろう。

さて、カントによれば「……われわれには二重の感覚、すなわち外的と内的とのそれらが存する以上、經驗的認識全体を総括して、世界をやはりこの二つにしたがって観察するのがふさわしい。すなわち、外的感覚の対象としての世界は、自然であり、一方、内的感覚の対象としての世界は、心ないし人間である。」¹²¹ さらにまた「自然と人間との諸經驗は、あわせて世界認識となる。人間

の知識を人間学によって学び、自然の知識は自然地理学ないし地誌学に負っている。」¹²² カントは大学の講義では、実用的な知識を与えるものとして、人間学と自然地理学とにかなりの力を入れた。この自然地理学の講義内容からしても、また彼の認識体系の理念からしても、自然地理学は自然記述に属する。自然地理学は主として地球の表面に生ずる自然現象を空間的な拡がりにおいて論ずるのに対して、天文学は地球を含めた諸天体の自然現象を空間的ならびに時間的に論ずるものである。自然地理学が概ね自然記述であるのに対して、天文学はその学的構成要素として自然記述と自然史を自己のうちに含む。そのみか、天文学は数学的ないし物理学的な要素をも必要とするのである。つまり天文学では数学を駆使せる物理学的方法が用いられるのである。

次に化学の位置づけを考えてみたい。カントによれば、化学の原理は究極的には經驗的であり、化学現象を説明する法則は經驗法則であって、化学には数学が適用されないのである。ところが本来の自然科学は数学が適用されるものである。このことからすれば、化学を本来の自然科学と称することはできない。カントによれば、化学は学問というより、むしろ体系的技術ないしは実験論である。化学が数学の適用を受けないということを大きな理由にして、カントはこのように化学に極めて低い位置しか与えなかった。化学に数学が適用されないとするカントの考えは今日では必ずしも妥当ではない。否、むしろそれは支持しがたいであろう。今までに述べた学問の分類の大要を、自然論を軸にして図示すれば、第5図のようになるであろう。

〔四〕

伝統的な形而上学の一部をなす合理的心理学は独断的なものであるが、それならば、真に批判に堪える心理学が存在するのであろうか。この問いに答えるには、経験的心理学について考察しなければならぬであろう。カントは経験的心理学に関しては幾つかの見解を示している。『純粹理性批判』によれば、経験的心理学は経験的哲学ないしは応用哲学に属する。すなわち「経験的心理学は本来の（すなわち経験的）自然論がおかれねばならぬ場所、つまり応用哲学の側へはいる。純粹哲学はこれに対して先天的原理をふくみ、したがってこれと結合されねばならぬけれども、混淆されてはならぬ。つまり経験的心理学は形而上学からは完全に追放されていなければならないのであり、既にその理念によって形而上学からは完全に排除されている。」¹²³ ただ、学校の習慣によって、経験的心理学は形而上学という住居にささやかながらも住むことを許されているが、この形而上学は、経験的心理学が人間学に転居するまでの仮の宿なのである¹²⁴。だが、このような見解に対して『自然科学の形而上学的原理』では経験的心理学は歴史的認識に属するとされている。さらに経験的心理学は、化学にもまして本来の自然科学の領域からは遠いものであるとされている。内官の現象やその法則には数学が適用されないのである。「……経験的精神論は決して記録的* なもの以上にはなりえない。そしてそれはこのような記録的なものであるから、せいぜい内部感官の体系的な自然論、すなわち精神の自然的な記述**たりうるけれども、精神科学とはなりえず、それどころか、とうてい心理学的実験論とすらなりえない。」¹²⁵ ここでは経験的心理学に極めて低い位置しか与えられていない。化学は実験論としては可能であったが、経験的心理学はそれ以下である。もちろんこのような考えは現代の学問観からすれば、必ずしも十分な妥当性をもたない。いずれにせよ、認識体系における経験的心理学の位置づけはカントにあっては、明確とはいいがたい。しかし、「歴史的認識」、「本来の（すなわち経験的）自然論」、「精神の自然記述」という三点からすれば、経験的心理学の占める場所はおのずと定まるであろう。

結局、経験的心理学は第5図の自然地理学と並ぶ位置を占めると解するのが、妥当であるだろう。

われわれは一応、経験的心理学の位置づけを行なったが、この心理学を、カントは人間学に属すべきものでもあると解している。しかして、彼によれば、人間学は経験的自然論の付属物である。これらの点からしても、次のような考えが可能なのである。「……人間学はカントの見るところでは、人間について方法論的に経験しうる一切を包含する一つの実証的な学問である。経験的心理学は人間学の諸分野の一つであるだろう。」¹²⁶ ところが、『実用的見地における人間学』には次のような叙述がある。「内的感官の知覚と、その知覚の結合によって合成された（真実の、あるいは見かけ上の）内的経験は、人間学的なものであるのみならず、心理学的なものである。人間学的という場合にはすなわち人びとは、人間が魂というもの（特殊な非物体的実体としての）を持つか持たぬか、ということは度外視している。だが心理学的という場合には、人びとは魂というようなものを自己の中に知覚すると信じており、そして単に感覚し思考する能力として表象されている心が、人間のうちに住む特殊な実体だとみなされているのである。」¹²⁷ このように二つの学問には、共通点もあれば相違点もある。カントは人間存在をしばしば問題にしたが、それに対する理解の仕方はまことに複雑である。それ故にまた、カントの人間学をめぐる解釈もさまざまである。われわれは、まず問題解決の手がかりに『論理学講義』の序論の一部を引用しよう。

「この世界市民的意味における哲学の分野は、次の問いに帰着せしめられる。

- 1, 私は何を知りうるか。
- 2, 私は何を為すべきか。
- 3, 私は何を期待してよいか。
- 4, 人間とは何であるか。

第1の問いに答えるものは形而上学であり、第2の問いには道徳が、第3の問いには宗教が、そして第4の問いには人間学が答えるのである。しかし、畢竟これらすべては人間学に数えられるであろう。何となれば、初めの三つの問いが最後の問いに関係するからである。」¹²⁸

ここでは、哲学が第2図で示される哲学的認識の全体をさすか、否かが、明らかでない。ところ

が、カントがC. F. シュトイトリン宛てた1793年5月4日付の手紙¹²⁹からすれば、われわれがいま問題にしている哲学は純粋哲学と看なされるべきであるが、カントの認識体系という見地からすれば、はたしてそうであろうか。問題の哲学がいかなるものであるにせよ、とにかく人間学は極めて広い意味に理解されており、それがために、カントの批判哲学そのものを人間学と看なす解釈も出てくるのである。しかして、カントの人間学を理解するには、それに先立って世界市民的意味における哲学とはいかなるものであるか、が問われねばならぬ。彼によると、哲学は学校概念と世界概念という二つの面から考えられる。哲学の学校概念によれば、哲学は「学問としてのみ探究されて、この知識の体系的統一、したがって認識の論理的完全性より以上の何ものをも目的としない認識の体系」¹³⁰である。しかるに、哲学の世界概念によれば、哲学は「総ての認識が人間理性の本質的目的に対して有する関係についての学問」¹³¹である。後者の意味の哲学が世界市民的意味における哲学と同じであることは、今さういふまでもない。世界概念からみた哲学は、認識の体系そのものを問題にするのではない。むしろそれは、格率が様々な目的のもとにおける選択の内的原理を意味する限りでの、われわれの理性使用の最高の格率に関する学問である¹³²。これらの点を考慮するならば、先の四つの問いはこれに応じて哲学が分類されるような体系的性格をもつものではない、といえるであろう。したがって人間学の位置づけを論ずる場合に、四つの問いをそれほど重要視する必要はない。

C. F. シュトイトリン宛の手紙には、人間学が純粋哲学の一部とならざるを得ない内容があったが、『実用的見地における人間学』の序文の註にも同様に解される部分がある。すなわち「私が初めは勝手に受けもち、後には教授義務として課されるようになった純粋哲学の仕事のうちで、私は30余年間を通じて、世間知を目的とした二つの講義を行ってきた。それがすなわち（冬学期の）人間学と（夏学期の）自然地理学とである。」¹³³しかして、いま「世間知を目的とした」という点を度外視するならば、「……人間学はカントの見るところでは、純粋哲学の一部であり、あるいは少なくとも純粋哲学に直接的に関係している」¹³⁴

という考えはかなりの妥当性をもつ、といえるであろう。ところが、カントが長年にわたって行なった『人間学の講義』の内容は、今日まさに『実用的見地における人間学』として残っているものである。ここにいたって、われわれは困難な問題に出合う。カントの標榜する純粋哲学としての人間学と『実用的見地における人間学』とは、単なる表現の形式としても相容されないように思われる。「実用的」とは「世間知を目ざす」の謂である。世間知を目ざしながら、なお純粋である哲学が、はたして存在するであろうか。これは甚だ問題である。さらにまた、『実用的見地における人間学』の内容は「人間学」というにしては余りにも「経験的心理学」的である。尤もこのことは、講義用テキストとしてバウムガルテンの『形而上学』に含まれる「経験的心理学」を使用したことにも起因するのである。

さて、カントの著書として残っている『実用的見地における人間学』が文字通り実的なものであるとするならば、外にいかなる人間学が可能であるだろうか。カントによれば、人間学は二つの見地から可能である。すなわち「人間についての知識に関する体系的にまとめあげられた理論（人間学）は、生理学的見地におけるものであるか、あるいはまた実用的見地におけるものであるかのいずれかでありうる。——生理学的人間知は、自然が人間をどんなものにしようとしているかという、その当のものの探究をめざし、実的人間知は、人間が自由に行為する存在者として、自分自身をどんなものにしようとし、あるいはすることができ、またすべきであるかという、その当のものの探究をめざしている。」¹³⁵ 生理学的見地における人間学は、自然としての人間ないしは自然から形成される人間を問題にする。しかるに、実用的見地における人間学は、自由の主体としての人間を扱うものである。前者は歴史的・自然論の自然記述に属するであろうが、後者は甚だ問題である。『人倫の形而上学の基礎づけ』では、物理学が経験的部門と合理的部門をもつと同様に、倫理学も経験的部門と合理的部門をもつとされている。そして倫理学では、合理的部門は道徳学であり、経験的部門は実践的人間学である。この実践的人間学は経験的であるが故に、むしろ実的人間学と称すべきものであり、ところで、既に述

べたごとく『純粹理性批判』では、純粹哲学は予備学としての批判と体系としての形而上学とに分けられ、さらに形而上学は自然の形而上学と人倫の形而上学とに分けられているが、經驗的哲学については、その内容が詳らかはでない。しかし、『人倫の形而上学の基礎づけ』における倫理学の部門分けを考慮するならば、われわれは經驗的哲学として經驗的な人間学を挙げざるを得ない。

以上のことから総合すれば、われわれは実用的見地における人間学を經驗的哲学の一部と看なさねばならぬであろう。また、經驗的心理学はもとも人間学に属すべきものであるとするカントの考えは、人間学を生理学的見地における人間学と解する限り、正当である。それならば、この二つのほかに人間学は可能であるだろうか。実用的でもなければ、生理学的でもない人間学は可能であるだろうか。この問題を論ずるには、それに先立って批判哲学の構造そのものを問題にしなければならぬ。純粹哲学に属すると解される、C. F. シュトイトリー宛の手紙にある人間学も、実はカントの批判哲学の目ざすものであって、現実に講義された人間学の内容はあくまで実的なものである。カントは時おり、この両者の区別を曖昧にしている。批判哲学全体の構想から必然的に出てくる人間学の像と、世間知を目的とする人間学のいわば通俗的な講義内容とは必ずしも一致しないのである。批判哲学の全体系から構想される人間については、いずれ機を改めて論じたい。

〔五〕

われわれは以上で、カントによる学問の分類を通観したが、その要点は次のようにまとめられるであろう。

1, 学問(認識の体系)の分類はもっぱら認識論的な観点からなされている。そこには二つの基準がある。(i)主観的な基準によって、認識は「合理的」か「歴史的」かになり、(ii)客観的な基準によって、認識は「合理的」か「經驗的」かになる。カントはこの(i)と(ii)とを組み合わせる認識の分類を行なっているが、「合理的」が二重の意味をもつので、分類に関する論述が煩瑣である。(ii)の「經驗的」に対立する「合理的」を、カントは「純粹」とも称している。

2, (i)哲学的認識と数学的認識との区別が、学問の分類上、大きな意味をもつ。(ii)自然認識における数学の役割が高く評価され、数学の適用の有無が、自然科学を分類する際の大きな目安となる。しかし、その結果、学問体系中に占める化学や經驗的心理学などの位置は低いものとなる。

3, 学問の分類の仕方全体は必ずしもカントの独創というわけではない。C. ヴォルフをはじめとする先達に倣ったところが多分に認められる。とりわけ、形而上学の分類の仕方は伝統的な形而上学の分類の仕方と概ね同じである。ただし、術語そのものは同じでも、その意味するところに多少の変化が認められる。

4, 人間学の位置づけが明確ではない。実際になされた人間学の講義の内容は、必ずしもカントの本来の人間学の内容をなすものではない。人間学の位置づけの不明確さは、人間存在そのものの複雑さに、その多くの理由をもつであろう。人間は自然の一部であると同時に自由の主体である。人間は自然と自由との交錯する世界に生きているのである。カントの本来の人間学は単なる人間学ではない。それは、批判哲学の体系全体との関連において初めて明らかにされるであろう。

註

◎ カントの著作からの引用について

- 1, 『カント全集』(理想社)に収められているものは、『純粹理性批判』と『論理学講義』を除き、原則としてこれに従った。
- 2, その他は、筆者が適宜に訳したものである。ただし、『純粹理性批判』の訳出に当っては天野貞祐訳(岩波文庫版)を参照した。
- 3, 原文でゲシュペルトの部分は傍点で示した。

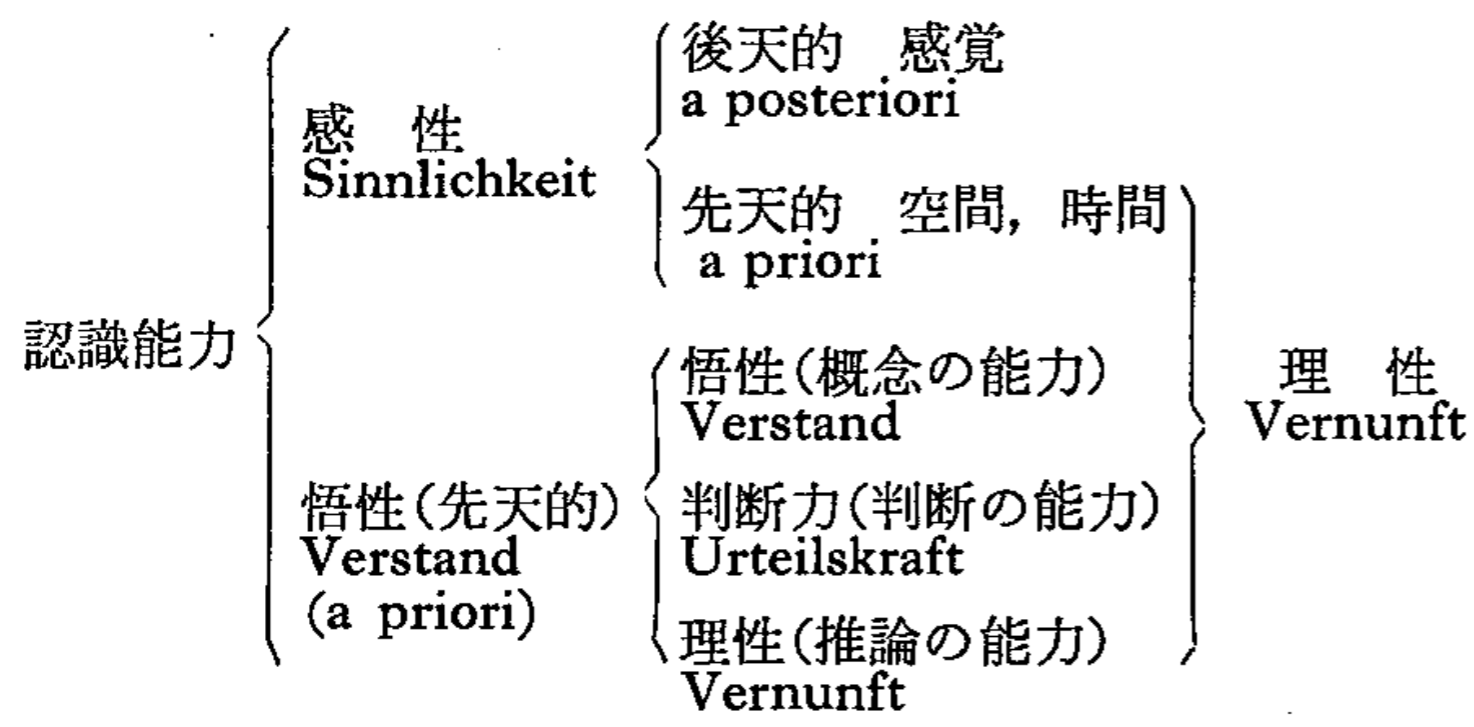
- (1) Kant, Kritik der reinen Vernunft, B 860.
- (2) Ibid., B 863f.
- (3) Ibid., B 864.
- (4) Vgl. Ibid., B 741f.
- (5) Vgl. Ibid., B 864f.

Vgl. Immanuel Kants Werke. Herausgegeben von Ernst Cassirer. Band VIII, S. 341 (Logik).

(以下、本著作集名をK.W.と略す。なお、括弧内は引用文のある著作名、以下同様。)

- (6) Vgl. Armando Rigobello, Die Grenzen des

- Transzendentalen bei Kant (üb. von Josef Tscholl), 1968, S. 233.
- (7) Kant, Kritik der reinen Vernunft, B 868.
- (8) Vgl. Ibid., B 25, B 869.
- (9) Vgl. Ibid., B 869.
- (10) Vgl. Ibid., B 870.
- (11) Ibid., B 869.
- (12) 『カント全集』(理想社)第7巻12ページ(『人倫の形而上学の基礎づけ』)参照。(なお、ページ数の次にあるのは、引用文のある著作名、以下同様。)
- (13) 自然学——原典では Physiologie となっている。この語はわが国では通常「生理学」と訳されているものであるが、カントの時代には今日とは異なった意味で使用されていた。Physiologie は、当時の言語の慣用に従えば Lehre von der Natur irgendeines Gegenstandes überhaupt, gleichviel welcher Art である、と H. ラートケも指摘している——Systematisches Handlexikon zu Kants Kritik der reinen Vernunft, 1929, S. 177. カントも当時の慣用に従って“Physiologie”を使用している。その具体的な使用例は彼の著作に少なからず現われている。(イ)『純粹理性批判』の AIX, A381, B 405, B 873 f. などや、(ロ)『プロレゴメナ』の§21, §23, §24 などに例が見られる(ただし、(ロ)の場合は形容詞 physiologisch)。自然学としての Physiologie は、勿論古代ギリシアの自然学としての physica とは異なる。古代ギリシアで成立した自然学は、カントの時代に、分化して幾つかの学科になっていた。いうまでもなく、物理学としての physica は自然学としての physica よりも狭い意味内容をもつものである。
- (14) Vgl. Kant, Kritik der reinen Vernunft, B 874. 前者の場合の自然学は合理的宇宙論と呼ばれ、後者の場合の自然学は合理的神学と呼ばれるものである。
- (15) 合理的心理学は「先験的弁証論」の「純粹理性の論過について」で論じられている。
- (16) Vgl. Kant, Kritik der reinen Vernunft, B 875 (Anm.).
- (17) Ibid., BX.
- (18) Vgl. Walter Bröcker, Kant über Metaphysik und Erfahrung, 1970, S. 8 f.
- (19) 『カント全集』(理想社)第10巻196ページ(『自然科学の形而上学的原理』)。
* 史学的——原典では historisch である。筆者はこれを「歴史的」と訳す。
- (20) 同全集 同巻 199ページ(同)。
- (21) 同全集 第15巻 40ページ(『自然地理学』)。
- (22) 同全集 同巻 同ページ(同)。
- (23) Kant, Kritik der reinen Vernunft, B 876.
- (24) Vgl. Ibid., B 876 f.
- (25) 『カント全集』(理想社)第10巻 200—201ページ(『自然科学の形而上学的原理』)。
* 記録的——原典では historisch である。
** 自然的な記述——原典では Naturbeschreibung である。筆者はこれを「自然記述」と訳す。
- (26) Vladimir Satura, Kants Erkenntnispsychologie in den Nachschriften seiner Vorlesungen über empirische Psychologie : Kantstudien 101, S. 37.
- (27) 『カント全集』(理想社)第14巻 83ページ(『実用的見地における人間学』)。
- (28) K. W., Band VIII, S. 343 f. (Logik).
- (29) この手紙の次の部分が、問題解決の鍵になると思われる。「——純粹哲学の領域に於て久しい以前から私に課せられてゐた研究の計画は、3個の課題を解決することでありました。即ち第1, 余は何を知り得るか(形而上学)。第2, 余は何を為すべきか。第3, 余は何を望むことが許されるか(宗教)がこれです。そして最後に第4の課題として、人間は何であるか(人間学、之に関しては既に20年以上も年々講義を続けて来ました)が之に続きます。」——『カント著作集』(岩波書店)第18巻 527—528ページ。
- (30) Kant, Kritik der reinen Vernunft, B 866.
- (31) Ibid., B 867.
- (32) Vgl. K.W., Band VIII, S.343 (Logik).
- (33) 『カント全集』(理想社)第14巻 25ページ(『実用的見地における人間学』)。
- (34) Frederick P. van de Pitte, Kant as Philosophical Anthropologist : Proceedings of the Third International Kant Congress (ed. by L. W. Beck), 1972, p. 574 f.
- (35) 『カント全集』(理想社)第14巻 21ページ(『実用的見地における人間学』)。
* 生理学的——原典では physiologisch である。筆者はこれを「自然学的」と訳したいが、本論文では訳書に従っておく。→註(13)
- ◎ カントにあつては、悟性ならびに理性はそれぞれ広狭の二義をもつ。このことについては、九鬼周造が『西洋近世哲学史稿』(岩波書店)下巻(37ページ)で次のような明快な図示を行なっている。



なお、本論文に現われる悟性ならびに理性が広狭いずれの意味をもつかは、文脈から判断すれば明らかであるので、いちいち示さなかった。